

発音指導と歌唱指導に関する考察

山 口 勝 之

【1】外来語の功罪

英語の発音に関して、特に教師の側で注意もするし試験問題でもよく狙われるポイントの一つが、日本語の中では実際の英語とは異なる発音・アクセントで使用されている「カタカナ表記の外来語」である。たとえば、calendar, advice, meter, Africa などの単語は綴りとして見たときに、その単語の意味は調べるまでもなくわかるのだが、大半の生徒は日本語の中で外来語として使用されている発音に引きずられて誤った発音をする。これを1つ1つ修正しながら覚えなければならないことが生徒にとっても大きなストレスであるし、読解の際には誤った音で認識していても正しく意味が取れるのだから、その誤りは些末な問題に感じられる。また、教師の側でも英文の意味を正しく解釈することと、正しい発音を習得することのどちらをより重視するかというバランスを考慮して、発音の誤りを放置したまま内容の解説に入ってしまうことがないわけではない。しかし、「中学高校の6年間で学習した英語が通用しない」という批判から、実際の場面で(主に会話で?)使える英語が求められている昨今の状況では、入試スキルとしての読解だけでなく、正しい音声の習得は必要であろうし、そもそも、正しい音を覚えていなければリスニング問題にも対応できない。また、単語の綴りを正確に覚えるためには発音と綴りの関係を理解しておくことが有効な手段となり得る。とは言え、発音ばかりに時間をかけていられない現状もあるので、正しい発音へ抵抗なく入っていける道筋がほしい。カタカナ外来語がその道筋を塞いでいるのが嘆かわしい現状なのである。英語教育において、外来語には「日本語の中で使用されている語彙が英語の語彙として使える」という歓迎すべき点もあるのだが、以下のような問題点が生じていることの方が深刻である。

- ①カタカナ表記でしか認識していないため、外来語として知っている語彙でも元の綴りを覚えることが別の作業になる。
- ② L/R, S/TH などの子音や[æ] [ʌ] [ɑ] [ɔ] などの母音のような、同じカナ表記で表される音を区別しない習慣が形成されてしまう。
- ③英単語が外来語として日本語に入る際に、なぜかわからないが意図的に英語とは異なった発音やアクセントが採用される傾向がある。その結果、正しい英語の音を覚え直す作業が必要になってしまふ。
- ④カタカナ的発音をすり込まれることによって、英語本来の発音を奇異に感じる学習者が多い。その結果、英語らしい発音することに羞恥心を感じる空気が発生する。

問題点①は本来可能なはずの語彙拡大という利点が活かしきれないというだけなので、もともと未知語だったと思えばあきらめもつくのだが、②③④の問題点は日本人が英語を習得する上で重大な阻害要因になっているように思えてならない。②に関しては、いずれも日本語のラ行とは異なる調音点で発音する音であるにもかかわらず、L/R の音が日本語のラ行と同じ音であるかのような錯覚を植え付けているのが最も罪深い。他にも二重母音と長母音を区別せずに code, cord, chord をいずれも「コード」と表記していること、[æ] [ʌ] [ɑ] [ɔ] がいずれも「ア」としか表記できないことなど母音の違いに鈍感な耳を作っている点も見逃せない。③に関しては、謎めいたルールが存在していると言いたいところだが、calendar を「カレンダー」、pattern を「パターン」と表記することに目をつむるとしても、なぜ本来の第1音節でなく第2音節を強く読む発音が外来語として定着してしまったのか。古くから定着してしまったものについてはある程度あきらめもつくが、最近になって「〇〇賞」の意味で使われ始めた「〇〇アワ

英語教師の立場でこういった問題を解決するのは非常に難しい。国策として英語を使える日本人を増やしたいと本気で考えているのなら、政府主導で外来語の扱い方を変えるべきではないだろうか。実社会のルールとして「外国語を(原語の表記・発音での)借用語として使用することは認めるが(カタカナ表記の)外来語は使用禁止とする」と定めることを求めたい。このルールを実践するには障害も多いだろうし、最初のうちはルー大柴的な滑稽さが生じるかもしれないが、しばらくすれば耳が慣れるはずである。社会の要求として英語を使える人材を増やしたいのであれば、英語を習得しやすい環境作りのために、社会の側も一肌脱がなければいけないはずだ。マスメディアを中心とする大人社会の側で英語学習の阻害要因をばらまいておきながら、その尻ぬぐいを英語教師と学習者に押しつけられている現状には大きな矛盾を感じる。

になり、第2強勢となるべき第3音節-brate が強拍の位置にきてしまっている。また、2つ目のフレーズでは、tonight は正しい強拍の位置に第1強勢の音節-night がはまっているが、kiss ではなく me が強拍にはまることによって、「他の人ではなく私にキスすることができますか？」という意味に聞こえてしまう。1つ目のフレーズとの意味上の対比を考慮すると動詞の kiss が最も強くなるはずなのだが、そうならないために奇異な印象を受ける。ちなみに、この歌詞で仮に私が作曲するとしたら以下のようにする。



第1強勢の cel-という音節は1拍目に配置し、第2強勢の-brate という音節は2拍目に配置してもよいのだが、16分音符1つ分前倒しすることによって、通常の2拍目よりは若干強めて第2強勢のリズム感を出してある。また、kiss を1拍目に配置して me より強くしている。

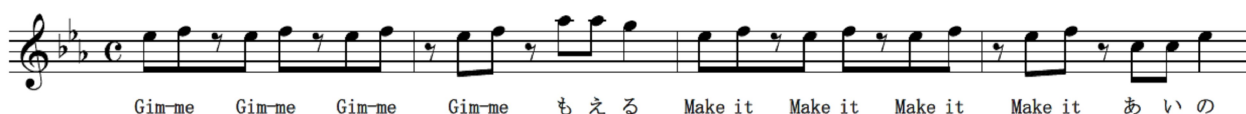
英語の歌詞が持つ強弱と音楽のリズムが合っていないのは "Can You Celebrate?" に限った話ではない。年末に NHK の紅白歌合戦を見ていて特に気になった曲を2つ挙げておく。

① TOKIO 「AMBITIOUS JAPAN!」 作詞：なかにし礼 作曲：筒美京平



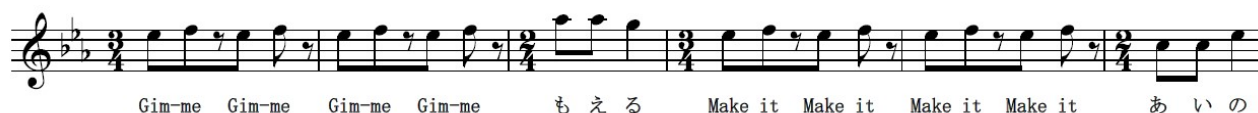
2003年にヒットした曲で、当時からひどい歌だと思っていたのだが、こんな曲が臆面もなくいまだに歌われ続けているこの国の文化が嘆かわしい。左側2小節が TOKIO が歌っている譜割りだが、am-bi-tious の第2音節だけが強くなるべきところを、無強勢の第1音節 am-を強拍である3拍目に配置し、強音の第2音節-bi-を弱拍の4拍目に配置して、無強勢の第3音節-tious にいたっては強拍の1拍目を半拍前にはみ出させて通常の1拍目よりもさらに強いリズム(この強拍移動はアンティシペーションと呼ばれる)になっている。つまり、英語の歌詞からすると、正反対の強弱リズムを形成しており、英単語として認識不可能な譜割りになってしまっているのである。作詞者と作曲者が異なるため後から作った方に責任があるのだろうが、先に作った方にも口出しする権利はあるだろうから、この歌詞と音楽のミスマッチに関しては両者同罪と考えてよいだろう。歌詞のリズム割りを考えると右の2小節(筆者改作)のような譜割りにしないと、英語の歌詞として聞き取ることは不可能である。この改作においては、本来無強勢の音節に第1強勢の音節よりも長い音符を割り振ること自体が無理なので、拍の割り付けに加えて音符の長さも修正している。ちなみに、音の高低に関しては必ずしも強音を高くしなければならぬわけでもないが、日本人には高低が強弱と等しく聞こえる傾向があるので合わせておく方が日本人の耳には英語として聞き取りやすくなる。

② ポルノグラフィティ 「青春花道」 作詞作曲：新藤晴一



まず、英語の強弱のルールを確認しておく。gimme は give me が縮まってできた表記であり、「他な

らぬ私に」という特別な対比で **me** を強く発音する場合にはこの短縮形にはならないので、この表記である以上、必ず **give** に相当する第 1 音節が強くなければならない。また、**make it** も代名詞の **it** が強く発音される文脈は存在し得ないため、**make** の方が強音となる。音楽的には **gimme** も **make it** も一見すると 1 回ごとに強拍と弱拍が入れ替わっているように見えるが、実際には、この 4 小節間のリズムは次のような変拍子に聞こえるようにできている。



3 拍子におけるリズムの骨格は 1 拍目と 3 拍目であり、なおかつ 1 拍目と 2 拍目がシンコペーションに聞こえるようになっていて、音の高低の印象も手伝って、弱音であるはずの代名詞 **me**, **it** の部分が全て強拍に聞こえてしまう。従って本来の英語の歌詞が持つ強弱のリズムとは全く逆の音楽リズムに乗っていることになる。ちなみに、同じリズムに英語の歌詞を正しく割り当てた楽曲としては中森明菜の「DESIRE ～情熱～」(作詞：阿木燿子、作曲：鈴木キサブロー)がある。Get up という歌詞の場合は動詞＋副詞の組み合わせなので副詞の **up** の方を強く発音するのが正しい。



この曲のように正しいリズムを割り当てた曲ばかりであれば問題ないのだが、先に挙げた 3 曲のように音楽のリズムと英語のリズムが合っていない歌が世に出てヒットしてしまうと、英語教師としては誤った強弱リズムを修正するのに余計な労力を割かなくてはならず、迷惑千万である。

【3】英語の発音指導と歌唱指導（理論）

巷に溢れる害悪に不平を言っただけでは何の解決にもならないので、そろそろ建設的な話題に移ることにする。英語の発音に対する意識を高めるために、英語の歌を歌えるように指導することは効果的である。そのこと自体は以前から認められているし、実際に多くの中学校で英語の歌は授業中の活動の一つとして実践されている。しかし、これが単なるレクレーション的な導入の位置づけになってしまっていることが多く、その印象から高校では「そんな遊びの時間を割く余裕はない」と言って切り捨ててしまいがちである。ここでは、英語の歌によって何が習得できるかということをまず確認しておきたい。

① 音符の割り当てがあるため、英語の音節の切れ目に注目せざるを得ない。

日本語は基本的に 1 つの音符に 1 つの仮名を割り当てればそれで音節を割り当てたことになるので、1 音符 1 文字という感覚になる。しかし、実際に割り当てているのは文字ではなく音節である。日本語と違って英語の音節は単語の中のどこで区切れているのかがわかりにくいのだが、音符に割り当てることによって音節のかたまりを意識できるようになる。試験のアクセント問題で、単語を正しく発音できるにもかかわらず、強く発音する音節が何番目なのかがわからずに不正解になる生徒も少なからず存在するので、音節の意識は結構大切である。また、語尾によるアクセント規則を教える際にも「**-ate** の 2 つ前が強い」と言っても、音節のかたまりを捉えることができなければ、結局どこが強い「2 つ前」なのかのわからないことになる。音節とは本来 1 つの母音を中心とする「ひとまとまりとして意識される音声連続」のことなのだが、英語の二重母音 [ai] [ei] [ou] などは 1 つの音節を形成するところが日

Yes-ter-day, — all my trou-bles seemed so far a-way

②音楽のリズムに合わせることによって、どの音を強く読むかが自然に体得できる。

音節強弱： ● · ● ● · ● · ● · ● · ●

Yes - ter - day, — all my trou - bles seemed so far a - way
Sud - den - ly, — I'm not half the man I used to be
Yes - ter - day, — love was such an eas - y game to play

- 5 -

の連続がある。3 番では was such で摩擦音の連続，such an で語末子音＋語頭母音，an easy でも語末子音＋語頭母音という連音があり，was such an easy という 4 語が全て連音で発音されることになる。英語らしく歌おうとすると連音を正しく処理することは避けて通れない道であり，連音で発音する習慣に結びつく。リスニングで連音の聞き取りを苦手とする生徒も多いが，自分が普段から連音で発音していればそれほど苦にならないはずである。

④模範歌唱を真似ようとするため、母音・子音を正しく発音しようとする意識が高まる。

発音の正しさに関しては、「指導者がうまく模範を提示できるかどうか」「学習者の側で模範を真似ようとする気になるかどうか」という要因があるのだが，英米でヒットした原曲のままを生徒が聞いてその歌い方を格好いいと感じれば，「うまく真似よう」という動機付けはできるはずである。

英語の発音で気をつけるべきなのは，日本語と英語の発音の共通点と相違点を区別しておくことである。日本語に存在する音をそのまま転用できる子音は[s, z, k, g, t, d, n, h, m, j, p, b, ʃ, tʃ, dʒ]であり，日本語と似ていても英語の音は異なるのだと意識すべき子音は[l, r, ʒ, w, ŋ]であり，そもそも日本語には全く存在しない子音は[f, v, θ, ð]である。最初のグループは特に意識しなくても普通に発音できるのでさほど注意する必要はない。第 3 グループの[f, v, θ, ð]についても中学校の段階でほぼ習得できているので大半の生徒は正しく発音できる。

問題は第 2 グループの[l, r, ʒ, w, ŋ]だが，特に[l,]と[r]に関してはカナ書きの悪影響もあってなかなか区別ができていない。そもそもローマ字でラ行に r の子音字を割り当てたから「[r]はラ行」という勘違いが生じているのだと思うが，[l] [r]はいずれも日本語のラ行とは異なる音であり，日本語の[ラ リルレロ]と[ra, ri, ru, re, ro] [la, li, lu, le, lo]の違いを舌の位置の図で説明した後で実演してみせると大抵の生徒は理解してくれる。その説明と練習は面白がって取り組むのだが，日頃の音読の中でそれを意識し続けていないところが習得に至らない原因であり，通常の授業中にも生徒がこの発音を区別できていなければ指摘するのだが，そればかりをやっているわけにもいかないのだから，見逃してしまうことも多い。また，[ʒ]に関しては[dʒ]と区別できている生徒は皆無と言ってもよい。無声音[j] [tʃ]は日本語でもはっきり違った音として認識しているが，有声音だと日本語には[dʒ]しか存在していないために，[ʒ]が[dʒ]に聞こえてしまう。また，英語の中で[ʒ]と[dʒ]だけの違いで別の単語に認識されるような minimal pair が存在しないことも，違いが無視される原因となっている。[w]に関しては日本人同士で通じる[w]の発音が海外で通じないことを深刻に受け止める必要がある。日本語の「ワ」の発音では唇の突き出し方の程度・突き出している時間の長さともに不足しているのが通じない原因なのだが，日本人教師の耳には聞き取れてしまうので授業中に訂正せずに流してしまうことが多い。また，we [wi / wi:] の発音で半母音の[w]にアクセントをつけようとする生徒も多いのだが，[w]は半母音とはいえ子音の 1 つなので強勢を置くことはできない。[ŋ]に関しては，[ŋg]が発音できても[ŋ]単独になると発音できないというところが問題なのだが，これは明らかにカナ書きの悪影響である。1993 年のセンター試験でこの区別を問う発音問題が出たが，これに自信を持って正解できる受験生はほぼ皆無だろう。[l] [r]はともかくとして，[ʒ, w, ŋ]に関してはいずれも，誤った発音であっても日本人の教師には何の単語なのかが判別できてしまうため，些末な問題として許容される傾向がある。しかし，歌を練習するときには，音が適切であるかどうか到達目標になるため，こういった発音の区別を集中的に鍛えることも可能になる。

母音については完全一致ではないものの，日本語の母音を転用しても構わないと思われるのがア[ʌ]，エ[e]，ウ[u]，オ[ɔ]だが，短母音の[ɔ]は米語ではほとんどが[a]なので，実質的には長母音の[ɔ:]と二重母音の[ɔɪ]の時だけ[オ]が転用できる。その他の母音は全て日本語には存在しない母音として違いを認識し，発音練習する必要があるのだが，あまりにも種類が多すぎるので，1 つか 2 つぐらいに絞りたい。

日本人が歌う英語の歌を聴いていて最も耳につく問題点は heard, early, work, world などに出てくる長

母音の強音[ɑ:]である。この音を日本語の「アー」と同じように発音すると全く英語に聞こえない。歌うときにこの発音をしにくいのは、日本人がこの音を苦手に行っていることだけが原因なのではない。そもそもこの[ɑ:]という母音は声楽的に美しい発声の対極にある音なので、特に声楽の専門家にとっては「正しく発音したくない」と感じるのではないかとさえ思える。日本語の「アー」でも「オー」でも発声練習をする際には口腔を広げて息の抵抗を少なくしてきれいな発声を心がけるはずだが、[ɑ:]の場合は口腔を狭くしたところに「アー」と同じような息を送り込むため、抵抗が大きくなり、こもったような音になる。つまり、「英語として正しく発声すると声楽的には美しくない音になってしまう」という、言語そのものの問題点が存在している。クラシックの歌曲の中で名曲として生き残っているものの大半はイタリア語やドイツ語のような母音の種類が少ない言語を使用した曲であり、日本語も母音の少なさから言えば声楽に向いている言語であると言えるのだが、英語では[ɑ:]や[æ]のような美しいとはいえない母音が多用されるため、英語はクラシックの声楽には不向きであると言ってよいだろう。このことは、ロックなどのポピュラー音楽が英語を使う音楽ジャンルとして独自に発達したと無縁ではないように思える。英語の歌を歌う場合には、この声楽的でない母音をいかに英語らしく(いわば汚い発声で)正しく発音できるかどうかを求めるのが英語教師としての指導のポイントになる。

⑤脚韻に注目することで、「同じ音」に注意を向けることができる。

脚韻のルールを高校生が覚える必要性はないかもしれないが、歌を扱う以上は脚韻についても少し触れておきたい。脚韻を学ぶことで、「同じ音」を捉える手がかりになる可能性があるからである。英語が苦手な生徒の中には、それぞれの単語を正しく発音できるにもかかわらず、試験の発音問題になると下線部が同じかどうかの判断ができない者が少なからず存在する。これは母音と子音がくっついたカナでしか音を捉えることができないのが原因なのだが、この問題を解消するために、脚韻を学ぶことには意味がある。実際の歌の中で脚韻を確認するために、再度 "Yesterday" を例に取り上げる。

Yesterday, All my troubles seemed so far away Now it looks as though here today Oh, I believe in yesterday	}	脚韻[ei]で統一
---	---	-----------

Suddenly, I'm not half the man I used to be There's a shadow hanging over me Oh, yesterday came suddenly	}	脚韻[i:]で統一
---	---	-----------

Why she had to go	A	[ou]
I don't know,	A	[ou]
she wouldn't say	B	[ei]
I said something wrong	C	[ɔŋ]
now I long	C	[ɔŋ]
for yesterday	B	[ei]

Yesterday, Love was such an easy game to play Now I need a place to hide away Oh, I believe in yesterday	}	脚韻[ei]で統一
---	---	-----------

脚韻パターンは1連4行ならAABB, ABAB, ABBAなどが主流だがこの歌はAAAAという徹底した脚

韻になっている。1連6行の場合、ABABCC, ABABAB, ABCABC, AABCCBなどのパターンがよく用いられる。この曲の歌詞の改行は各連が3行・3行・2行・3行になるように表示されることが多いが、ここでは脚韻に注目するために4行・4行・6行・4行で表示している。

【4】英語の発音指導と歌唱指導（実践）

前章の理論に基づき、土曜FW講座を利用して授業を実施した。

- ・日時：平成26年1月11日（土）13：10～14：00
- ・対象学年：1・2年
- ・参加者：1年2名，2年21名，計23名
- ・到達目標：①音節の切れ目を理解して1音符に1音節を当てられる。
②英語の強弱リズムと音楽の強弱リズムの一致を確認する。
③連音で発音することができる。
④子音[l][r]を区別して発音することができ，母音[ɑ:]が正しく発音できる。
⑤脚韻の性質を理解し，同じ音が見つけれられる。
- ・使用楽曲："Yesterday" "We Are the World"
- ・指導手順：(1) 到達目標①②③⑤のポイント説明（10分）
(2) 子音[l][r]，母音[Λ][ɑ:] [ɑ:]の説明と練習（10分）
(3) "Yesterday"のリズム読みと歌唱演習（15分）
(4) "We Are The World"のリズム読みと歌唱演習（15分）
- ・考察：日本語の「ア」が決して1種類ではないということには授業の準備段階で気づいていたのだが，授業中の説明として日本語の「アー」の母音でオクターブの発声練習をさせると，低音域の「アー」は[ɑ:]の発音であるのに対して高音域の「アー」は[Λ:]のような発音になっていることに生徒も気づいた。日本語としては同じ「アー」の音素に属するため違いを意識しにくいのだが，音楽的な音の高低を利用することで舌先の位置の変化を体感しやすくなり，この変化が英語では異なる母音の音素となることを説明できる。一旦舌先の位置を意識できるようになると，日本語の「オ」と「ウ」の中間ぐらいの口の開け方で舌先を少し上げることによって[ɑ:]の発音をさせることができた。普段の英語の授業ではなかなか習得に至らないことが多いのだが，これが習得できたところは音楽と融合させた指導の大きな収穫だったと言える。
歌詞のリズム読みでは，"Yesterday" の all my troubles seemed so far away という部分を記譜通りに全て八分音符で均等に発音したものと，実際にポール・マッカートニーが歌っている歌詞とを比較することで，機能語が連続するところは拍を詰め，内容語は引き延ばす歌い方に気づかせた。英語の歌詞は日本語のように均等配置するのではなく，歌詞に合わせて拍が伸び縮みすることを意識することによって，意味を考えた歌い方(=読み方)の重要性が理解できたようである。
- ・生徒用配布プリント：次頁以降に掲載

土曜FW講座「英語の歌の歌い方」～歌で身につく発音～ 2014.01.11実施

■本日の到達目標：

- ①音節の切れ目を理解して1音符に1音節を当てられる。
- ②英語の強弱リズムと音楽の強弱リズムの一致を確認する。
- ③連音で発音することができる。
- ④子音[l][r]を区別して発音することができ、母音[ə:]が正しく発音できる。
- ⑤脚韻の性質を理解し、同じ音が見つけられる。

■基本的注意事項

①「1音符に1音節」とは？

- ・allのように[母音+子音]の音節が1つの音符に割り当ててある場合、音符の終わり際に子音を発音する。決して最後の子音の後に母音を付け足さない。「オール」のようにカタカナ的に発音すると音節の数が増えてしまう。
- ・[ei][ou][eə]のような二重母音で強いのは前の母音であり、これが1つの音符に割り当ててある場合、後の母音は音符の終わり際に発音する。
- ・[子音+子音+母音]の音節が1つの音符に割り当ててある場合、最初の子音は素早く連続させてできるだけ早く母音の発音を始める。
- ・1つの音節が複数の音符にまたがることもあるが、その場合、伸びるのは母音であり、音節の最後の子音は最後の音符の終わり際に発音する。

②「英語の強弱リズムと音楽の強弱リズムの一致」とは？

- ・4拍子の曲では1拍目と3拍目に第一強勢、2拍目と4拍目に第二強勢、裏拍は無強勢。
- ・弱音が連続する場合には楽譜の譜割りよりも詰め込んだ歌い回しをする歌手が多い。

③「連音」はなぜ起こるか？

- ・①のルールに従って、前の音節の最後の子音は音符の最後に発音されるので次の音符の直前で発音される。よって、次の音符の最初の音が母音であれば[母音+子音][母音]が結果的には[母音][子音+母音]のように聞こえることになる。

④子音[l][r]、母音[ə:]はどんな音か？

- ・[l][r]はいずれも日本語のラ行とは異なる音である。舌の位置に注意する。練習のコツは日本語の[ラリルレロ]を普通に発音したときの舌先の位置を把握しておくこと。口の中のやや奥側で上の壁(口蓋という)に舌先が一瞬触れるときにラ行の子音が発音されているはず。舌先の前後の位置関係は変えないようにして、その場所で舌先が口蓋に当たらないように発音すると[r]の発音になる。[ラリルレロ]との差を明確にするために[ra, ri, ru, re, ro]と発音してみるとよい。次に、[ラ行]の発音位置から舌先を前に出し、上の歯茎に舌先を押し当てた状態で舌の両脇から息を通過させると[l]の発音になる。[ラ行]の発音の際に舌先が口蓋に当たるのは一瞬だが、[l]はやや長めに接触しなければならない。[ラ行]との差を明確にするために[la, li, lu, le, lo]と発音して確認するとよい。また、語尾の[l]の場合は息を出し終わるまで舌先を歯茎から離さない。
- ・[ə:]も日本語の「アー」「オー」「ウー」を発音してみて、口の開け方と舌先の位置を意識することで練習できる。まず、日本語の「ア」は決して1種類ではないことに注目する。驚いたときの「アッ」という発音の場合、舌先の位置は少し奥にあってやや上に反り返る形になる。この音が英語の cut, money などに出てくる母音[ʌ]に非常に近い。また、誰かの説明を聞いて深く納得したときの「あ～」という発音の場合、舌先が少し前に出て低い位置におさまる。この音が card などの長母音[ɑ:]に非常に近い。この音が短くなると hot などの米音[ɑ]になる。さて、いよいよ[ə:]の発音だが、準備として「オー」「ウー」を発音して口の形を確かめる。「オ」「ウ」の中間ぐらいの口の開け方にして、舌先の位置・形は驚いたときの「アッ」の状態で「アー」と同じ息の量を出す。これで[ə:]が正しく発音できるはず。オ・ウの中間の口腔形状でアを発音しようとしているので、かなり喉に抵抗を感じるが、その抵抗感が正しい発音の証拠。

⑤脚韻とは？

- ・行末の単語の語尾を同じ音にそろえること。そろえ方には AABB, ABAB, ABBA などのパターンがある。

<演習 1> リズム, 連音, L/Rの区別に注意して歌ってみよう。

Yesterday

J. Lennon & P. McCartney

Yes - ter - day, — all my trou - bles seemed so far a - way
Sud - den - ly, — I'm not half the man I used to be
Yes - ter - day, — love was such an eas - y game to play

Now, it looks as though they're here to stay — Oh I be - lieve in yes - ter - day —
There's a shadow hang - ing o - ver me — Oh yes - ter - day came sud - den - ly —
Now I need a place to hide a - way — Oh I be - lieve in yes - ter - day —

Why she had to go, I don't know she would - n't say —

I said some - thing wrong, now I long for yes - ter - day D.C

Yesterday,
All my troubles seemed so far away
Now it looks as though here today
Oh, I believe in yesterday

Yesterday,
Love was such an easy game to play
Now I need a place to hide away
Oh, I believe in yesterday

Suddenly,
I'm not half the man I used to be
There's a shadow hanging over me
Oh, yesterday came suddenly

Why she had to go A [ou]
I don't know, A [ou]
she wouldn't say B [ei]
I said something wrong C [ɔŋ]
now I long C [ɔŋ]
for yesterday B [ei]

★ここがポイント！ R/L を区別しよう。

← wrong

← long

<演習 2> [ɑ:] [ɔ:] の区別に注意して歌ってみよう。

We Are The World

There comes a time when we heed a certain call
When the world must come together as one
There are people dying
And it's time to lend a hand to life
The greatest gift of all

We can't go on pretending day by day
That someone, somewhere will soon make a change
We are all a part of God's great big family
And the truth, you know
Love is all we need

We are the world, we are the children
We are the ones who make a brighter day
So let's start giving
There's a choice we're making
We're saving our own lives
It's true we'll make a brighter day
Just you and me

Send them your heart so they'll know that someone cares
And their lives will be stronger and free
As God has shown us by turning stones to bread
So we all must lend a helping hand

We are the world, we are the children
We are the ones who make a brighter day
So let's start giving
There's a choice we're making
We're saving our own lives
It's true we'll make a brighter day
Just you and me

When you'll down and out, there seems no hope at all
But if you just believe there's no way we fall
Let us realize that a change can only come
When we stand together as one

We are the world, we are the children
We are the ones who make a brighter day
So let's start giving
There's a choice we're making
We're saving our own lives
It's true we'll make a brighter day
Just you and me

by Michael Jackson & Lionel Richie

(singers)

(Lionel Richie)

(Lionel Richie with Stevie Wonder)

(Stevie Wonder)

(Paul Simon)

(Paul Simon with Kenny Rogers)

(Kenny Rogers)

(James Ingram)

(Tina Turner)

(Billy Joel)

(Billy Joel with Tina Turner)

(Michael Jackson)

(Diana Ross)

(Diana Ross & Michael Jackson)

(Dionne Warwick)

(Dionne Warwick & Willie Nelson)

(Willie Nelson)

(Al Jarreau)

(Bruce Springsteen)

(Kenny Loggins)

(Steve Perry)

(Daryl Hall)

(Michael Jackson)

(Huey Lewis)

(Cyndi Lauper)

(Kim Carnes with Huey Lewis)

(All)

We Are The World

M. Jackson / L. Richie

There comes a time when we heed a certain call when the world must come together as one. There are

people dying and it's time to lend a hand to life the greatest gift of all.

We can't go on pre-tending day by day that some one somewhere will soon make a change. We are

all a part of God's great big family and the truth, you know, love is all we need. We are the world,

we are the children. We are the ones who make a brighter day so let's start giving. There's a

choice we're making, we're saving our own lives, it's true; we'll make a better day, just you and me.

Oh Send them your heart so they'll know that some one cares and their lives will be strong and

free. As God has shown us by turning stones to bread, so we all must lend a helping

hand. We are the When you're down and out, there seems no hope at all, but if you

just believe, there's no way we can fall. wow wow wow wow Let's realize oh that a

change can only come when we stand together as one.

【5】英語の歌詞作文指導（実践）

2章で挙げたような歌詞割り付けの問題が今後も巷に横行してしまわないために、英語教育の中で歌詞の割り付け方にはルールがあることを指導しておく必要がある。そのため、前章の講座と同日に歌詞作文の講座も実施した。

- ・日時：平成26年1月11日（土）14：10～15：00
- ・対象学年：1・2年
- ・参加者：1年0名，2年5名，計5名
- ・到達目標：①音節数を意識しながら作文する。
 - ②英語の強弱リズムと音楽の強弱リズムの一致を考えながら作文する。
 - ③脚韻を踏むことを考える。
- ・使用楽曲：「ふるさと」／"Maxwell's Silver Hammer"／"Shade"
- ・指導手順：(1) 到達目標①②③のポイント説明（10分）
 - (2) 使えそうな語句や文を書き出す個人作業（10分）
 - (3) 個人考えた語句を板書し，歌えるように整形する（10分）
 - (4) 完成品の訳詞を鑑賞（10分）
 - (5) 訳詞以外のアプローチを紹介[英→英の替え歌][完全創作の作詞]（10分）
- ・考察：「ふるさと」は楽譜を準備していなかったのだが，意外と認知度が低かったため，日本語で曲の紹介をするはめになってしまった。音節を音符に割り振る作業もあるので，作詞指導をする際には，曲の認知度にかかわらず必ず楽譜を準備すべきである。

予想通り英語の作詞には生徒は苦戦したが，生徒から出てきた語句を使って歌える形に整えることで，一応自分たちで作ったような達成感は得られたのではないかと思う。しかし，今回の講座の目的は「英語で作詞ができるようになること」ではなく，「英語の作詞のルールを覚えること」であり，「歌詞の英作文はルールに縛られているために，普通の文を作るよりもはるかに難しい」ということがわかってもらえたので十分である。

訳詞の完成品として，筆者が数年前に作ったものも紹介したが，今改めて見直してみると，音符への割付け方が良くないところが多々ある。自分の訳詞で歌ってみせて悪い点を指摘した後で Greg Irwin の作品を鑑賞させると，音符割付けをかなり崩してあるということに生徒も気づいた。

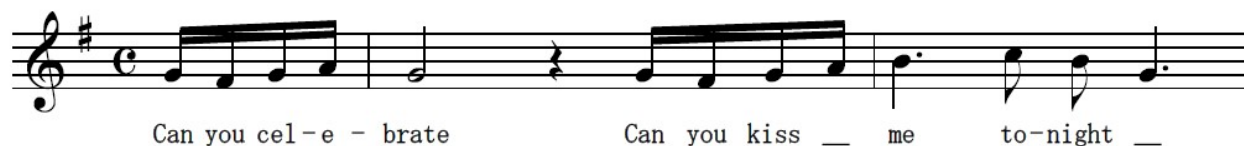
「リズムに乗って英語を読むようなつもりで歌詞を作るのがよい」ということが何となくわかってもらえたようである。

- ・生徒用配布プリント：次頁以降に掲載

■英語の歌詞を作る際の注意点

- ① 1つの音符に1つの音節を割り当てるのが原則
- ② 音楽の強拍に強勢のある音節がくるようにリズムを作る。
無強勢の音節に長い音符を割り当てない。
- ③ 可能なら脚韻を踏む

■悪い例（1） 安室奈美恵 "Can You Celebrate?"（作詞作曲：小室哲哉）



■悪い例（2） TOKIO「AMBITIOUS JAPAN!」作詞：なかにし礼 作曲：筒美京平

※左の2小節が原曲

右の2小節は山口改作



<演習1> 日本の歌を英語で歌うための歌詞を作ってみよう。

「故郷(ふるさと)」 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一

うさぎ
兔 追いし かの山
こふな
小鮒釣りし かの川
夢は今も めぐりて、
忘れがたき ふるさと
故郷

い か い
如何に在ます 父母
つつが
恙 なしや 友がき
雨に風に つけても
思い出ずる い
故郷

こころざし
志 を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷

高野辰之 作詞

山口勝之 訳詞

うさぎ
兎 追いし かの山
こぶな
小鮒釣りし かの川
夢は今も めぐりて、
忘れがたき 故郷

In the mountains I chased hares day after day
In the brooks I caught small crucian beneath the clay
I still dream of those scenes, I never leave my memories
Oh my home, why am I so far away?

い か い
如何に在ます 父母
つつが
恙 なしや 友がき
雨に風に つけても
思い出ずる 故郷

How are you these days, Mom and Dad?
I'm also worried about my fellow lads
When it's rainy, when it's windy, I'm reminded of you
Oh my home, I indeed love you so bad

こころざし
志 を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷

Someday when everything I've sought is done,
I'll be back, I'll be the victorious one
Mountains' bright green, brooks' clear blue, such breathtaking scenery
Oh my home, back where I ought to run

(翻訳者不詳)

"My Country Home" by Greg Irwin

Sometimes I dream I'm on the Hill
Chasing the wild hare - freely at will
Catching small fish - as the Brook murmurs by
Place of my birthright - for you I sigh

Back in the mountains I knew as a child
Fish filled the rivers and rabbits ran wild
Memories, I carry these wherever I may roam
I hear it calling me, my country home

Father and Mother - once you taught me
That treasures of life - are all given free!
Friendship and happiness - Sunshine and Rain
Your words come back to me time and again

Mother and Father, how I miss you now
How are my friends I lost touch with somehow?
When the rain falls or the wind blows I feel so alone
I hear it calling me, my country home

Clear crystal brooklet - fresh Hills of Blue
Whisper across the Breeze - where are you?
when fortune smiles on me - then Furusato
I will return to you, I love you so!

I've got this dream and it keeps me away
When it comes true I'm going back there someday
Chrystal waters, mighty mountains blue as emerald stone
I hear it calling me, my country home

＜演習 2＞ 英語の替え歌を作ってみよう。

※手順(5)のタイミングで配布

MAXWELL'S SILVER HAMMER

J. Lennon & P. McCartney

Joan was quizzical [A]
studied pataphysical [A]
science in the home
Late night all alone with a test-tube, oh, oh, oh, oh. [B]
Maxwell Edison [C]
majoring in medicine [C]
calls her on the phone,
Can I take you out to the pictures Joan. [B]

But as she's getting ready to go,
A knock comes on the door.

Bang bang Maxwell's silver hammer came
down upon her head, [D]
Clang clang Maxwell's silver hammer made
sure that she was dead. [D]

Back in school again, [E]
Maxwell plays the fool again, [E]
Teacher gets annoyed,
Wishing to avoid an unpleasant scene, ★
She tells Max to stay [F]
When the class has gone away, [F]
So he waits behind,
Writing fifty times I must not be so. ★

But when she turns her back on the boy,
He creeps up behind,

Bang bang Maxwell's silver hammer came
down upon her head, [G]
Clang clang Maxwell's silver hammer made
sure that she was dead. [G]

P.C. thirty-one [H]
said, we've caught a dirty one, [H]
Maxwell stands alone
Painting testimonial pictures, oh, oh, oh, oh. [I]
Rose and Valerie [J]
screaming from the gallery [J]
say he must go free.
The judge does not agree and he tells them so. [I]

But as the words are leaving his lips,
A noise comes from behind,

Bang bang Maxwell's silver hammer came
down upon his head, [K]
Clang clang Maxwell's silver hammer made
sure that he was dead. [K]

Silver hammer man.

＜この歌をここで取り上げる理由＞

この曲では、陽気な音楽に合わせて残酷極まりない内容の歌詞が歌われている。この音楽と歌詞のミスマッチはポール独特のブラックジョークなのだが、「陽気な曲には陽気な歌詞を」というテーマで替え歌に取り組ませることができる。替え歌では、元歌の強弱や音節数がわかっているのので、同じ音節数で同じ強弱を当てはめることを意識することができて、訳詞よりは作業がしやすいこともある。授業実施時には楽譜も配布したが、ここでは割愛。

＜演習3＞ まだ歌詞のない曲に歌詞をつけてみよう。

※手順(5)のタイミングで配布

Shade

Katsuyuki Yamaguchi

The musical score for 'Shade' is presented in seven systems. Each system contains a treble and bass staff. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 3/4. Measure numbers 10, 18, 26, 35, 45, and 53 are indicated at the start of their respective systems. The score includes various musical notations such as chords, single notes, and rests.

※完全な創作は未知の曲でなければならぬので、筆者の自作曲を例として使用した。

実際に創作に充てる時間はなかったのでアプローチの紹介のみ。

【6】「ふるさと」訳詞の譜割り修正

2章では他人の作品を批判したのだが、筆者が数年前に作った「ふるさと」の訳詞にも今改めて見直すと拙いところがある。楽譜と歌詞を一緒に世に出してしまう前に修正をしておかなければならない。作成当時は以下のような譜割りを考えていた。(○印が主な問題点)

OH MY HOME (ふるさと)

訳詞：山口勝之

The musical score is written in 3/4 time, key of D major. The lyrics are in English, with Japanese in parentheses. Red circles highlight specific words in the lyrics, indicating areas for correction.

Lyrics and corrections:

- In the moun - tains I chased hares day af - ter day. In the
- brooks I caught small cru - cian be - neath the clay.
- I still dream of those _ scenes, I nev - er leave my mem - o - ries.
- Oh my home, why am I so far a - way?
- How are you these _ days, Mom and Dad?
- I'm al - so wor - ried a - bout my fel - low lads.
- When it's rain - y, when it's wind - y, I'm re - mind - ed of _ you.
- Oh my home, I in - deed love you so bad.
- Some day when eve - ry - thing I've sought is done,
- I'll be back, I'll be the vic - to - rious one.
- Moun - tains' bright green, brooks' _ clear blue, such breath - tak - ing scen - er - y.
- Oh my home, back _ where I ought to run.

歌詞の英語の強弱と音楽の強弱が一致していない場合の修正には2つの方法がある。1つは楽譜に合うように歌詞を訂正すること、もう1つは歌詞に合うように歌い方を変えることである。この歌詞の作成当初、原曲の譜割りに合わせて歌詞を作ることしか筆者の念頭になかった。しかし、今回の授業準備の過程で Greg Irwin の訳詞音源に触れ、目から鱗が落ちた気がした。そもそも日本語用に作った旋律にそのまま英語の歌詞が当てはまるはずがないのである。拙訳を原曲の譜割りにそのまま当てはめた場合の問題点を確認しながら、歌詞ではなく譜割りの方を部分的に修正していく。

< 1 番の 1 段目 >



ここでは hares の [éə] という二重母音が2拍目の裏から3拍目にかけて割り当ててあるが、二重母音は前の母音の方が強く発音されなければならない。このように裏拍から表拍にかけてまたがると引き伸ばした二重母音は弱いはずの後ろの母音が強拍に配置されることになり、[eə] という英語に存在しない二重母音を発音した(または1音節が2音節に分かれてしまった)ことになる。また、強音と弱音の長さのバランスも逆である。もう1つの問題点は day after day で強音と弱音が等間隔になっている点である。強音と弱音が均等な間隔で配置されると英語のリズム感としてはやや不自然になる。また、2拍目と3拍目では3拍目の方がやや強い拍なので after の強弱関係は逆のようにも聞こえる。これらの問題点を解決するために譜割りを変更する。



hares の部分では、ラからソに下りるタイミングを3拍目の裏に遅らせて2拍目の裏と3拍目の頭をタイでつなぐことによってアンティシペーションのリズムに変えた。これによって、二重母音の途中で音符をまたがっていても前の母音が強いという条件を守れるし、強音と弱音の長さのバランスも良くなる。day after day の部分では、次の小節の1拍目を半拍前にはみ出させることによってアンティシペーションのリズムにする。第2強勢の af- よりも無強勢の -ter の音節の方が強い(または同じ強さ)という印象は、-ter の長さが半分になることで解消される。必要はないかもしれないが、I chased hares の部分にも同じ修正を適用してみた。ここを自分で修正してみて初めて、ポップスでこのアンティシペーションのリズムが多用されている理由がわかった気がした。また、記譜の上では等間隔で表示されていても歌手が勝手に歌い回しの中でアンティシペーションのリズムに変えてしまうことも多いし、以下のような「しゃくり」の歌い回しにすることも多い。



「しゃくり」はアンティシペーションになるべき長音の途中で音程が変わるだけなので、強音が弱起になってしまっているのではなく、強拍に強音が配置されていると考えて差し支えない。以後1～3番共通で1段目と2段目には day after day の部分と同じアンティシペーションでの修正を適用するが、これを記譜通りに歌うか「しゃくり」にするかは歌手の判断に委ねることとする。

< 1 番の 2 段目 >



この段には2カ所問題点がある。**crucian** (鮎) は2音節で前が強いのだが、2拍目の裏に強音が配置され、3拍目の頭に弱音が配置されている。また、**beneath** は2音節で後ろが強いのだが、強拍の1拍目に弱音が配置され、弱拍の2拍目に強音が配置されている。**beneath** の修正方法としては前を強く発音する類義の前置詞 **under** に置き換えることも可能なのだが、ここでは2つの問題点を一気に解決するように譜割りを変更することにする。

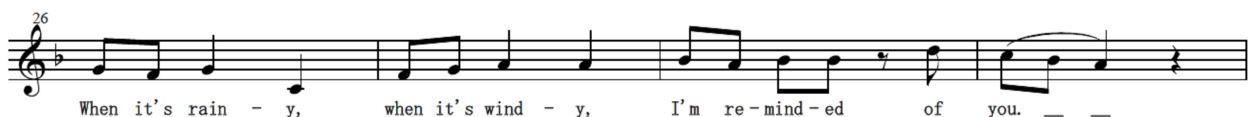


強音 **cru-** は2拍目の裏から2拍目の表に変更し、無強勢の **-cian** は3拍目の表から3拍目の裏に変更して、この単語の強弱・緩急逆転問題は解決させた。また、**beneath** の弱音節 **be-** を1拍目裏に送り、強音の **-neath** を2拍目の頭に配置した。ついでに **the clay** はアンティシペーションに変更。

< 2 番の 3 段目 >



この部分については、そのままで良いかもしれないが、前置詞の **of** をここまで強く発音するのはやや不自然なので、譜割りを変更することにする。

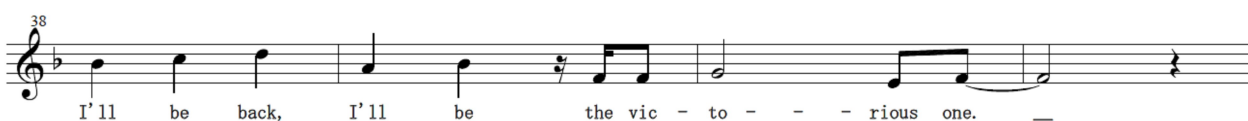


of を前の小節の3拍目裏に送り、強拍に来るべき **you** を1拍目から2拍目にかけて動く音にはめてみた。また、**of** を前に送ったことの波及効果で、**reminded** も自然な長さにおさまった。

< 3 番の 2 段目 >



ここでの問題点は **I'll be the** のところで動詞よりも冠詞の方が強い拍に配置されていることと、第2音節にアクセントがある **victorious** が1拍目から始まっているために、1拍目と2拍目の強弱が逆になっていることの2つである。これも歌い方を変えることで修正できる。



victorious の第1音節を前の小節の3拍目裏に送り、動詞の **be** は2拍目の頭に四分音符で配置し、冠

詞の **the** は十六分音符に縮めて名詞の方にくっつけてみた。リズムから考えても意味内容から考えてもこちらの方が適切である。

このように自分の歌詞の譜割りを修正してみて、改めて痛感したのは「日本語の歌と英語の歌は全く違う」ということ。日本語の歌は音節数さえ合っていればよいので、比較的譜割りを固定して歌いやすい。「ふるさと」は六四調という一風変わった定型詩であり、3拍子の四分音符を均等配置すればよいので作曲する側も曲を書きやすい。これは七五調が4拍子にピッタリはまるのと同じ理屈である。最近の歌謡曲の歌詞はかなり自由度が高くなってはいるが、それでも作詞家が1番と2番には同じ文字数の歌詞を準備しておきさえすれば作曲家は楽に歌詞割り付けの作業ができる。これは、日本語の歌には強弱の制約がほとんどないためであり、英語で同じような強弱無視の譜割りをすると英語に聞こえない歌になってしまう。これまで英語の歌を多数歌ってきた経験はあるが、「英語らしさ」のカギを握っているのは強弱・長短(緩急)のリズムだということを再確認できたし、このことは歌だけでなく、普通の英文を読むときにも当てはまることだと確信できる。授業の場面でどれだけ音声面の指導するか、という重点の配分にもよるが、英語らしいリズムで英文を読むための指導をするつもりがあるのならば、歌は非常に効果的な教材になり得るのではないだろうか。

最後に、筆者が感銘を受けた Greg Irwin の "My Country Home" は You TUBE で検索すればすぐ見つかるので、一度視聴してみることをお勧めしておきたい。

※完全な蛇足ですが、拙訳「OH MY HOME(ふるさと)」の歌唱例として筆者が録音した音源を以下の個人サイトに置いてあります。次頁の最終形の譜面とも変えた部分が多々ありますが、ご試聴いただけると本稿の趣旨がご理解頂けるのではないかと思います。リズムの確認が目的なので、メトロノームを鳴らしただけの無伴奏となっており、歌唱力の面でもお聞き苦しいことと思いますが、ご容赦ください。

音源サイト：<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~dsch/kiyo/>

※最終形

OH MY HOME (ふるさと)

訳詞：山口勝之

The musical score is written for a single melodic line in G major, 4/4 time. It consists of 11 staves of music, each with a corresponding line of lyrics in English. The lyrics are in a simple, nostalgic style, reflecting the theme of homesickness. The score includes measure numbers 6, 10, 14, 18, 22, 26, 30, 34, 38, 42, and 46, indicating the start of new lines of music. The lyrics are: 'In the moun - tains I chased _ hares _ _ day af - ter day. _ In the brooks I caught small cru - cian be neath the clay. _ I still dream of those _ scenes, I nev er leave my mem - o - ries. Oh my home, why am I so far a - way? How are you these _ days, Mom and Dad? _ I'm al - so wor - ried a - bout my fel - low lads. _ When it's rain - y, when it's wind - y, I'm re - mind - ed of you. _ _ Oh my home, I in - deed love you so bad. Some day when eve - ry - thing I've sought is done. _ I'll be back, I'll be the vic - to - - - rious one. _ Moun - tains' bright green, brooks' _ clear blue, such breath - tak - ing scen - er - y. Oh my home, back _ where I ought to run.'

In the moun - tains I chased _ hares _ _ day af - ter day. _ In the
6 brooks I caught small cru - cian be neath the clay. _
10 I still dream of those _ scenes, I nev er leave my mem - o - ries.
14 Oh my home, why am I so far a - way?
18 How are you these _ days, Mom and Dad? _
22 I'm al - so wor - ried a - bout my fel - low lads. _
26 When it's rain - y, when it's wind - y, I'm re - mind - ed of you. _ _
30 Oh my home, I in - deed love you so bad.
34 Some day when eve - ry - thing I've sought is done. _
38 I'll be back, I'll be the vic - to - - - rious one. _
42 Moun - tains' bright green, brooks' _ clear blue, such breath - tak - ing scen - er - y.
46 Oh my home, back _ where I ought to run.